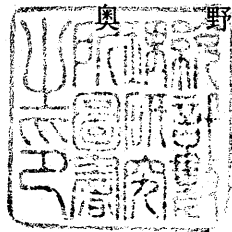


T 02
N 69
4

日本における統計学の発展

第 4 卷

話	し	手	美	濃	部	亮	吉
聞	き	手	三	瀧	信	邦	通
					定		



1981年1月22日(木)

参議院議員会館にて

ま え が き

1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀆信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)

2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

統計委員会事務局長となる

三瀨 それではお願いします。

最初は、先生にお渡ししたメモの最初にありますように、先生が統計委員会関係で記録に出てくるのは、昭和21年12月20日付の統計委員会準備会に、大内、近藤、野田、川島などの諸先生と一緒に名前が出てくるわけですね。それで、なぜ統計委員会準備会に先生が引っ張り込まれたのかということ、まず最初に伺いたい。

美濃部 ぼくは、準備会の記憶はほとんどないのですがね。

奥野 準備会は一度しかやってないんですよ。

三瀨 日付によれば12月20日に準備会があって、1週間後の28日にすでに本委員会が開かれているんですね。でも、準備会があったことは確かのようにです。

美濃部 準備会というのは、ぼくがいないでやったんじゃないのかな、出席しないで。

奥野 それはあり得るかもしれません。

美濃部 ぼくはどうも記憶が確かじゃないけれども。

三瀨 当然先生は、大内先生からお声がかかったに違いないと思いますけれども。

美濃部 それはいつだったか全くはっきりはしないのですが、昭和21年の春から夏にかけてだと思いうけれども、先生からこうこうこういうわけで、戦後の統計を本当の統計にするという話があり、それに統計委員会というのが行政委員会という形でできて、その事務局長になってほしいという話を受けた。そのときは毎日新聞の論説委員であって、論説委員は非常に居心地がよくって、続けてやりたいとは思っていたんです。

話は少し横道にそれますがけれども、そのころ、組合運動に対する弾圧が非常に強くなって、読売新聞の共産党の労組委員長、鈴木東民。

奥野 編集局長ですね。

美濃部 東民氏を大将にして、読売が新聞社として一番猛烈に組合運動をして、どういうふうな経過をたどったかはよく覚えていませんけれども、とにかく惨敗して、そして組合運動が抑圧された。つまり、どこの新聞社もそうだと思うけれども、民主主義的に経営されていたのが中央集権的に変わるのではないかと思われた。

それで、毎日新聞も組合が相当に強くなって非常に民主主義的に経営されていて、いいか悪いかは別として、論説を書くにしても全く個人の自由——若干の相談はしますけれども、相談はしても、ほかの論説委員の人たちが少し意見をいうくらいのものであって、本筋においては個人の意思によって書くといってもいいような状態であったのが、組合が読売で負け、それから毎日で負けた。そうすると非常に中央集権的になって、論説も自分の自由には書けないというふうには、まだなっていないんだけれども、なることが想像できたんで、少々毎日新聞に残るのもいや気がさせていた。

もう一つは、何といたっても毎日は私は外様ですからね。

三瀬 その何年ぐらい前に毎日に入られたんでしたっけ。

美濃部 それは戦争直後だから、20年の初めだったと思うな。

三瀬 20年の、戦争直後なら秋でしょう。

美濃部 8月の直後ですね。そして、何といたっても外様

であって、ぼくが「エコノミスト」の編集長になってほしいというのが「エコノミスト」の人たちの総意であつたらしい。それがとにかくダメだ。どういう理由か知らないけれども、結局は外様の人はおもしろくないということであろうと思うのです。

三渚 「エコノミスト」の場合も……？

美濃部 ぼくは「エコノミスト」をやりたかっただけですよ。非常にやりたかったので、そういうこともあって、少し毎日新聞にいや気がさしていたところに、大内先生が一流の口説き上手で、戦後の日本の民主主義はどうしても世論、つまり国民の意思と、あるいは国民によるという政治が非常に必要なんだけど、国民の意見というものは、すべての情報が国民にオープンになっていて、そうして国民が判断をできる材料がすべて整っているという状況であることが基本であって、そういう点において統計が非常に大切である、あらゆる統計が秘密ではなくして公表されなければならないということと、それから統計の数字というのは非常にわかりにくいものであるからして、それをわかりよく発表することが必要である。それからどういうふうな統計をつくるのか、国民に密着した情勢がわかるような統計をつくらなければならないので、国民のいろいろな状況がわからないような戦争とか、そういうことに関係する統計ばかりつくっているようではよくない。そういう意味で大内先生は、われわれが統計委員会をつくって、そういう統計をつくっていくことにしたいんで、その事務局長になってほしい。その統計委員会は行政的な決定権を持っている、いわゆる行政委員会であるからして、統計委員会が統計法に基づいて

統計に関するあらゆる政策の決定をする権限もきちんと書いてあって、それはその決定に従って実行するという役割りが事務局長である、そういうことでぜひやってほしいということがあったんです。

それでぼくは、直接そういう場面は有沢君などの方が非常に詳しいだろうと思うけれども、実は8月15日の直後だったと思うのです。

三渚 八王子の方にいらしたのでしょうか、疎開されて。

美濃部 いや、吉祥寺にいたの。そのころ、鳩山一郎氏がぼくの親類ですから、鳩山さんを通じて、大内、有沢、脇村、ぼくというふうな教授グループを呼んで。

三渚 終戦になる前ですね。

奥野 直後でしょう。

美濃部 直後。そのときにはまだ鳩山氏が政権をとる可能性のあったときなんだ。それでパージになってダメになった。そのときの用意でもあるし、それから大内先生よりも、そのときはぼくに大蔵大臣になってほしい、大蔵大臣か、インフレの問題に関連して日本銀行総裁か、どっちかになってほしいという話でした。

三渚 先生、40歳ぐらいでしょう。

美濃部 40歳ぐらいだ。

……といわれたんで、ぼくはそれは断わろうと思って、まだ多少迷っているうちに鳩山さんがパージになって、すっかりご破算になったわけなんです。

しかし、そのときに、教授グループを呼んで、今後状況はどうなるだろうか、いろいろ話を聞きたいというんで、会合をどこで持ったか忘れちゃったけれども。

大内先生はインフレーションが最大の問題で、必ず非

常なインフレーションが来る。それでぼくに大蔵大臣になってくれという話があったと同時に、大内先生も一株乗ってほしいという話もあったんですよ。

そうして、ぼくは全然関係はないんですけども、吉田さんが政権を握って、その話が吉田さんに何かの形で受け継がれたんだと思うんですよ、ぼくの想像ですが。それでなくとも、あれはどっちが先かな。

三瀨 高野先生を通ずる高野—大内というラインがありますね。

美濃部 もちろんそれもあるかもしれない。

三瀨 公の記録では、大内先生に吉田茂が統計再建の全権をゆだねて、高野先生が大内さんに頼めと、いた。内閣に入るのはダメだけれども、最後には頼めということに公式記録ではなっていますね。

美濃部 それは大内先生が吉田さんから話をして、そうして高野さんに相談をしたんだろう。それで高野さんは自民党の中に入っちゃいかぬ、統計ならいいだろうということ——ぼくは直接何も知りませんが、そういわれたんだろう。あるいは、吉田さんが高野さんから話を聞いてそういうことをいったならば、なったと思うんだ。もし高野先生が了解をしていて高野先生が大蔵大臣に大内先生を推薦したんだらば、高野さんはやりたまえということをお大内先生に勧め、そうして高野さんのいうことであるならば、大内先生も相当食指は動いていたに違いないですからね、やっただに違いないと思う。だけれども、高野さんにとめられたからやめたんだろう。これは全然想像ですよ。

三瀨 大内先生には一定の政治的なファイトはあります

ね。

美濃部 それは、と後だけれども、ぼくが知事になる
ときに、大内先生と一日話をした。オレの血の中には政
治家の血が流れているんだ。おやじが非常に政治が好き
で、何から何まで、てしまつて井戸とへいが残った。
つまり、井戸べい主義がそのまま実現しているんで、大
内先生が勉強しに東京に出るときにお母さんにいわれた
んだって。おまえは政治をするんならば「井戸べい」に
なるつもりでやれ、そうでなければやるな、政治家を本
当に志したならばどうしても「井戸べい」になるんだか
ら、それを覚悟してやるというんならやりなさいとい
うことをいわれて、オレは大蔵省から大学に行つて学者に
なつたんだけれども、オレの血の中には政治的志向が非
常にあるんだ。われわれは戦前、民主主義を志してひど
い目に遭つている。それが東京都知事という地位は非常
に強いし、知事のお意思によつて動けるものだ。つまり、
政府に対しても非常に力が強いので——42年ごろはいま
のようなことはなかつたんだけれども、やはり田中角栄
の高度成長なんかがあつたですから、またいつか来た道
を進む。その際にそれを何としてでもとめなければなら
ないんで、東京都知事という地位は、そのファシズム化
をとめ得る可能性を持った地位であつて、そういう地位
が提供され得るというのであるならば、ぼくだつたらば
それは当然受ける。しかし君はぼくと違つて、政治家の
血でなくて学者の血が代々流れているんだから、その点
は違ふ。それに、もし立候補しても勝つてこない。ただ、
選挙で民主主義を説いて回るといふだけでも、ファッシ
ョの勢いをとめる一つの防波堤になるんだから、出してみ

たらどうかという話で、そのときに方々から執拗に迫られていたからでもありますけれども、引き受けてしまった。

ただ、大内先生は政治的な動きをすることがちっともきらいじゃないし、そうして実にすぐれた政治家であって、先生が政治家として非常に優秀な点は、見通しが確かだということだな。つまり現状がどういう状況にあるかというその見通しについて、経済学的分析をして非常に正確であるということと、それから、非常に柔軟なんですよ。こちこちの社会主義じゃなくて、社会主義の理論と実際とは違う。理論はマルクス・レーニン主義で一貫をするけれども、それを実際に応用するという点においては非常に柔軟であった。

それで、話が非常に飛ぶけれども、ぼくはどうも大内先生の身がわりみたいな役割りを演じたんで、話をもとに戻すと、事務局長になるということも、当然先生が中心になってあれだけやった統計の整備だから、元来ならば先生が事務局長で、統計委員会の委員長を兼ねてやるのが当然だなとは思ったんだけど、とにかくぼくが事務局長になれという。事務局長というのは非常に重大ですから、身がわりになって統計の整備をやった。

それから、東京都知事になる場合においても、大内先生としては、当時78歳かな、自分ではとうていできないけれども、ぼくは当時62歳だから、とにかくファッションを防ぐとりでとして、あるいは民主主義を普及するということが大内先生の一生の願いであって、それが一生の願いであるにもかかわらず……。ああ、そうか、こういうこともいっておられたな。われわれの教授グループは

理論的には民主主義を目指してあらゆる行動をしたけれども、ただ一人も政治家がいない。それは名折れだというんだ、理論だけやって政治家がいないということは。三瀬 実践ですか。

美濃部 実践家がないというのはよくない。だから、君だけでも実践をやってほしい。それが先生の本心であって、これだけ臭いメシを食ってまでも民主主義の実現のために努力をしたのに、民主主義の実践家が一人もいない。その点において、まさにぼくは身がわりにされたんだと思うんです。

三瀬 先生、ちょっと伺いたいのですが、統計委員会のメンバーを見ますと、いまおっしゃるように、いわゆる教授グループの方もおられるけれども、そうじゃなくて、山中四郎さんのように本当に無台裏をなさっていた、いってみれば革新官僚でしょう。そういう方と統計関係の官僚の代表も入っている。ぼくが質問したいのは、先生が事務局長を引き受けられるときに、当然教授グループだけで統計委員会ができていないことはご承知だと思うのですが、その辺はどういうふうにお聞きになり、評価というか、判断をなさったんでしょうか。

美濃部 そういう点では大内先生は非常に柔軟なんじゃないですか。ですから、教授グループでも有沢君は統計をやっていますし、大内先生もいる。統計をとにかくやってきたのは大内先生と有沢君だけ。また、高橋君も統計の講義はしている。そういう点においては非常に物事を客観的に見られる人ですから、森田君とか中山君とか、こういう統計をやってきた人たち、そういう人たちで準備会なり統計委員会なりをつくるのがいいと思われたん

でしょう。ぼくは統計は全く知らなかったのです。

三渚 現状分析での統計の利用者ではあったわけですね。

美濃部 利用者ではあったけれども、統計の理論なんというものは全く知らなかったので、それを事務局長にしたというのは、事務局長というのは統計プロパーのことではなくて統計行政ですから、行政的な天分があればいいんで、統計のことは統計委員会が決めるんだから、全然素人でも困るけれども、ある程度の知識さえあればいい、そういうふうを考えられて、ぼくは行政的手腕があるとは思わないけれども、ほかに人がいないためもあるんでしょう。

三渚 先生はいわゆる行政側とは、それまでは人的にもほとんどかわりをお持ちにならなかった……？

美濃部 全然持たなかったですね。大内先生のような関係は全然ないです。

GHQ及び各省との関係

三渚 統計委員会が発足して、当然占領下ですから、GHQと統計改革の関係が非常にあると思うのですがけれども、先生が事務局長の立場におられて、あるいは統計委員会をある意味では実質的に代表なさって、GHQとの対応の中で、あるいはライス統計使節団も来日しましたけれども、どういうことを一番印象としてはお持ちでしょうか。イニシアチブと申しますかね。

美濃部 ぼくは統計においては、GHQというのは一般の行政とは違えますからね。民主主義的な統計をつくるという点では、GHQと日本側とはほとんど全く同じであって、GHQでぼくの意見を述べた場合、大概それに

賛成してくれた。

ただ、1つ根本的な点でGHQとひどく衝突をして結局負けた点は、これは大内先生も同じだったんですけども、農林統計の作報。

三瀧 作物報告事務所ですね。

美濃部 作報と、それから厚生省の医療行政統計。医療統計はどこでやっていたかな。

奥野 保健所でしょう。人口動態でしょう。

三瀧 それは後に人口動態は統計局から厚生省に移る。

その前の話でしょう。

美濃部 その前です。

奥野 人口動態が厚生省に移る前は、統計局です。市町村でとらえていた。

三瀧 衛生統計ということになれば市町村じゃないですね。

美濃部 市町村じゃない。

三瀧 出生、死亡のような人口動態はずっと統計局がやっていて、それが厚生省に移りますね。先生のお話しなさったのは……。

美濃部 センサス的な医療統計。

三瀧 人口動態じゃなくて、衛生統計というか……。

美濃部 それを統計局でやらせるか厚生省でやるか。それから作報の問題は、作報でやるか。それから地方の……。

三瀧 統計課。

美濃部 県庁でやらせるか。あるいは、ぼくと大内先生とは県庁もよくない、それは国がやる、県は県の目的のための統計を独自につくるという役割りを果たすんで、

中央官庁が県の統計に関与することはよくない。ましてやいまやっているように、国の方の補助金でほとんど国の統計の組織の一部の形になったら……。

三瀨 下請ですね。

美濃部 これは民主主義の地方自治ということに真、向から衝突するということ、作報はやめにして、県庁で独自で調べて、国にそれを報告する。あるいは国自体の統計機関の統一した組織でやる。

三瀨 いってみれば、それは中央統計局構想ですね。

美濃部 そうそう。それだから中央統計局の構想でもあるし、それから基準局といいますか、統計委員会と統計局との関係の問題でもあるわけですね。

三瀨 それは後にまた伺いたいんですがね。

美濃部 それで、その問題でライスさん、スタッフさんはぼくたちの説に完全に一致して、そうあるべきだ。つまり、地方の系統と国の系統とは別にして、地方に必要な統計は県庁で独自の責任を持ってやるべきであるというのですけれども、それに対して作報のGHQの代表と厚生省の代表と猛烈に反対をして、ライスさん、スタッフさんの力といえども及ばなかったのです。

三瀨 GHQの調査統計部長のロスと、ライスさん、スタッフさんの統計使節団の考えとは違っていたんですが。

美濃部 それは同じなんです。格別違いはない。

それでそのことが争われて、統計委員会において最終的な決定をするというときに、ライスさんとスタッフさんが来て、その争いについてはロスさんは全然関与しなかったのですよ。つまり、うっかり関与して農林省と厚生省の代表のGHQの人と衝突したら、自分の身が危

ないですからね。

三瀨 GHQ内部の問題ですね。

美濃部 そう、内部です。とっても彼は反抗し得ないで、スタッフさんとライスさんとがわれわれの代弁をして、GHQで大いに働いてくれた。それでぼくらのような考え方が最後まで通りそうな形で、大内先生ともこれでいいと喜んでいたら、たしか統計委員会が開かれて、その前にちょっと大内先生のところに来いというので行ったら、スタッフさんからどうしてもダメだということを宣告されて非常にかっかりして、そのことが戦後の統計に決定的な影響を与えたと思う。たとえば、地方に中央が全然関与しないで地方自治を統計にも応用する、ぼくはやっぱりそうすべきだったなと思うのですよ。それは、そうすれば一時は統計の質が悪くなるかもしれない。しかし10年間ぐらいたてば、立派な統計が県においてもできるというときが来るんですけれども、それができるためには財政的な自主権がなければダメだ。

三瀨 自治体がね。

美濃部 いまのように財政の自主権が全然なしに、財政が全部国の意思によって統一されて、そうして地方自治体が中央の家来として行動をするということが、財政面でも規制されるようになっていたら、それはもっと統計は悪くなる。

いまいったように県に自主的に統計をつくる権限を持たせるためには、すべてが民主主義的な傾向にならなければダメなんで、しかし理想というか、どうな、たかわかりませんが、どっちかにいく。中央集権的な統計にいくか、地方分権的な統計にいくか。あのときが分

かれ目であって、中央集権派が勝って、そして統計がいまもってちっともよくなりません。(笑)

三瀨 その場合の中央集権派は、各省を中心にした縦割り中央集権ですね。農林省は農林省……。

美濃部 2つあるんですよ。一番根本的なのはいまいった地方分権で、地方の統計は地方がつくる。そういうのと、それから今度は中央の統計局が大きくなって、各省の統計部はその命令を聞いて手足になって働く。しかし両方ともダメになったんですね。それで旧態依然とした統計組織が続いている。

三瀨 そのときに、例に出されました農林省の作物報告事務所、作報が一番あれなんですけど、農林省が猛烈に近藤康男先生を大将にがんばったということですか。

美濃部 そのときは近藤君とは非常に衝突をして。

三瀨 近藤先生は教授グループではないんですね。むしろ農林省の統計課長をやっていたら……。

美濃部 教授グループではない。近藤君と衝突したのは地方自治ではなくて、中央統計局の問題だな。そして、彼と正木君と衝突した。

三瀨 正木統計委員と近藤さんですか。

美濃部 あれは、統計委員会が統計基準局になるときだね、あのときは。

三瀨 近藤先生はご承知のように、もともとのお考えは非常に民主的な方ですね。しかし農林官僚を背景に背負っては、農林省の統計を一本にしようという全軍の指揮官としてはやむを得なかったということになるでしょうね。

美濃部 作報保存という点においては頑強でしたよ。

奥野 近藤先生と知り合われたのは、統計委員会に入ってからですか。それ以前はお知り合いじゃなかったのですか。

美濃部 ほとんど知らないです。もちろん知ってはいましたけれども。

三渚 森田先生とはどうですか。

美濃部 森田先生もほとんど。統計委員会を通じて知りました。

三渚 中山伊知郎さんは？中山先生はわりあい大内先生と近いですね。そんなことも聞いているのですがね。

美濃部 しかし教授グループのときには、ああいう人たちはみんな警戒して、全然近寄らなかつたですよ。

三渚 近代経済学でもあるし……。

美濃部 全然近寄らなかつた。

三渚 そうすると、中山伊知郎氏は統計委員会になってお知り合いになったということでしょうか。

美濃部 そうですね。傾向が非常に違いますからね、ブルジョア経済学と。

三渚 でもそれは、大内先生、非常に幅広い方だから、恐らく中山先生は統計の専門家の一人として森田先生ともども……。

美濃部 それは統計というものにおいては、それほどブルジョア的と社会主義的と民主的と違いがないですからね。

三渚 その技術的な面ではね。

美濃部 だから、中山君といえども社会主義者じゃないけれども、民主主義者ですから、その点においては完全に一致できるでしょう。

三瀨 各省と統計委員会との関係では、いま先生が挙げられた農林省とか厚生省、そのほか通産省等では、当時の商工省ですか……。記憶に残られるのは農林省と厚生省ですね。

美濃部 しかし、それは程度の差はあるけれども、各省ともに、通産、農林、厚生、この3つが統計の3大拠点ですから、それは通産も同じように通産の独立性を主張して。

三瀨 統計組織の……？

美濃部 そしてその点において、表面はそれほどあらわにはいれないけれども、反統計委員会ですよ。つまり、統計委員会の力を強くしては困る。根本的には地方に委譲するとか、それから中央統計局をつくるとか、それは極端な場合で、それだけでなく、統計委員会に対するアンチの態度というのが明白でしたね。

三瀨 それは、自分たちの行政の権限を奪われると思うのでしょ。

美濃部 そうそう。そうしてそれがぼくの基準局長のときに、だんだんそういう傾向が強くなって、それから後藤正夫君、河合三良君。河合君のときに徹底的に負けたんじゃないかな。ぼくは統計基準局長じゃないから正確には知らないけれども。

三瀨 統計基準局というのは、いまは、組織の上ではなくなっただけですね。

美濃部 結局、官僚に負けたな。完全に負けたですね。

三瀨 官僚は強いですからね。

奥野 それで戦争直後のときには、統計局は内閣統計局という名称で、川島孝彦さんをトップにする戦前からの

が、ちりした統計官僚がいたわけですね。一方、新しい統計委員会ができましたね。それから統計法ができた。その両者の関係では、統計委員会は統計局を弱くする。あまり大きな顔をさせないということを旗印にして動いたと思うのです。各省もそれをねらっていましたか。どうでしょうか。

美濃部 いや、その点はばくは違うと思うな。統計委員会が統計をとる、自分で統計をつくるということを考えたことはないですよ。

奥野 それはそうですね。

美濃部 それだから2つあるんだな。1つは、統計局がいわゆる中央統計局のように頂上になって、そうして国の統計の全部を統一的に統制するという点においては、統計局と統計委員会とは非常に密接な関係があって、同じなんです。ただ、その後で、しかしその上に統計委員会がいて、そうして統計局の勝手にはさせない、コントロールするということがどうしても必要だ。つまり、統計局というのは結局は統計の技術家たちですから、統計をもっと広く政治的に社会的にどういうふうにするかという見地から統計を見る能力がない。そういうことを見るのは統計委員会である。だから、敵であり味方であつたわけなんです。

奥野 なるほど。

三猪 そういう意味で、川島統計局長、川島試案なんか出しておりますけれども、川島さんと統計委員会は一線というか。

美濃部 川島さんはいわゆる技術的な昔ながらの統計家であつて、民主主義化の1つの手段としての統計という

見地から統計を見るということは全然なかったですね。
 三瀨 第1回の統計委員会の委員のメンバーになっていますね。やっぱりそこでは、川島さんという人はおもしろくなくったでしょう。

美濃部 おもしろくなくった。彼とか森さんとか。

三瀨 森數樹さんね。

美濃部 同じ系統だ。つまり、彼らは彼らなりに、何を素人の人たちがやっているか、オレたちが統計の技術をマスターした本当のスタティシアンだという誇りを持っていた。

三瀨 自負があっただでしょうね。

美濃部 つまり、政治的に統計はこうあるべきだ、民主主義的であるべきだというようなことは考えないし、当然のことながら、それであるからして地方分権的な、地方に必要なものは地方でつくれ、そういうような議論に対しては真っ向から反対した。

三瀨 それから、中央統計局構想というのは実現しなかつたのですけれども、これは大内先生は、できたらやったらどうかとお考えになっていましたか。

美濃部 それはもちろんだ。

三瀨 としたら、先生も……？

美濃部 ぼくも。

三瀨 その場合、こういうことを聞くんですが、どうでしょう。当時、民主化の過程ですから、権力の地方分散ですね、県知事でも何でも。それなのに統計だけセントラリゼーションでやる。あとの政治は、ディセントラリゼーション。そこに、時代の流れとして無理があつたのでしょうか、中央統計局構想が実現しなかつたのは。

美濃部 セントラリゼーションといっても、ぼくらの地方を含めてのセントラリゼーションではなくて、国の統計だけのセントラリゼーションであって、地方の統計はディセントラリゼーションである。

三瀨 さっきおっしゃるようになりますね。

美濃部 だから本質的にいえば、ぼくらはディセントラリゼーションでもって、国の統計はセントラリゼーションをすべきである。だから、大きく分ければ国の統計と地方統計であって、国の統計は国の政策遂行の資料をつくれればいい。地方住民に密着した統計は、これは地方がつくる。だから、君たちが昭和52年からやった生計費指数が、まさにそうなんだと思う。

三瀨 それはまた後で伺いましょう。

その場合、実現しなかったんだから幻なんですけれども、中央統計局構想の末端組織は都道府県の統計課ではなくて、中央統計局のブランチを持つというふうなこともお考之になったんでしょうね。

美濃部 そこまで薄々いろいろ議論はしてはいたけれども、具体的な案ができるほど、統計の地方分権化の速度は進まなかったですよ。

統計委員会と統計審議会との比較

三瀨 それでは、次の話題ですけれども、行政委員会としての統計委員会がなくなると統計基準部になり、先生が初代の統計基準部長になられて、同時に、統計委員会は統計審議会になる。統計委員会と統計審議会と比較なさって、先生を中心でいえば、統計委員会の事務局長なり統計委員会の委員である時代から、今度は統計基準部

長になられたわけでしょう。そして、委員会から統計審議会に変わったわけですね。そういう変わり方が日本の統計行政にとって、どういう意味を持っていたでしょうか。

美濃部 ぼくが統計基準部長や局長でいる間は、やはり統計委員会が主体であって、統計委員会の決めたことをそのまま実施をするのが事務局長の任務であり、また同じようにその後の統計基準局長の任務であった。

しかし、審議会には行政権がなくなっただろう。それだから、統計審議会の決定したものと違ったことを行政管理庁などがやっても、法律的には差し支えない。

三瀨 何も罰せられることはない。行管の長官は諮問を出して答申を受けるだけだから。

美濃部 しかし、ぼくのとときには、少なくとも統計審議会なり統計委員会なりが決定したものと違ったことをやるとか、あるいは決定したことを故意にやらないとか、統計審議会あるいは統計委員会と正面衝突的な態度をとる、それほどでないにしてもそういうことはなかった。

もう一つは、統計審議会にかける議題について重要なことをかけない、あるいは非常に議題が縮小されるということがあると思うんですよ。実際は統計審議会と違ったことを基準局長がやるとか、あるいはサボるとか、そういうことはいまないだろうと思う。

ただ、何かから何まで重要だと思われることは、すべて統計委員会にかけたと同じように統計審議会にかけるかといえ、統計委員会あるいは統計基準局そのものが非常に地盤沈下しましたから、その点でもあろうけれども、統計審議会の重要性といいますか、重みというのか、こ

れが非常に減って、あってもなくてもいいような存在になりつつあるんじゃないかな。

それがまた、統計基準局についてもいえるんじゃないかな。それだから、大内先生とぼくが考えてきた形とは非常に違っちゃっている。そのことはとりもなおさず、日本の政治の民主化がとまっちゃって、反民主主義的な傾向に進むわけだから、反民主主義的な傾向に進めば進むほど、民主主義的な性格を重んじようと思ってやってきた統計委員会及び指定統計、その他の制度は、だんだん意味が小さくなっていく。

三瀧 行政委員会としての統計委員会が、昭和27年7月31日になくなりますね。そのときに行政委員会でなくなったという時点で、敗れた第1号ですね。しかし、これは一般の官僚にとっては、自分たち以外に行政権を持っているのはおもしろくないのでしょうか。

美濃部 それはおもしろくない。

三瀧 そうすると、官僚の勝ちですね。

美濃部 まあそうですね。それだから、官僚主義というのが非民主主義的なものですから、その意味において平たくいえば、官僚主義に完全にやられてしまった。

三瀧 先生が統計基準局長、最後は34年1月30日ですが、それまでのご経験の中で官僚主義の抬頭というか、そういうのを具体的に仕事を通じて感じられたかどうか。

美濃部 具体的にはぼくは知らないけれども、非常にそのことは痛切に感じていて、後藤君にもくれぐれも官僚主義に負けないように、負けてはダメだといって、後藤君は相当闘ってくれてはいたんですけども、それもだんだん退却をして、そうして河合君のときに、悪いけれ

ども、ほとんど全面的に敗北した。

三猪 統計基準局を廃止するというのは運が悪かったけれども、河合局長のときだったわけです。

奥野 いや、そうではなくて、統計基準局が廃止されて統計主幹ができたときに、河合さんは行政管理局長になったのです。

三猪 大内先生や何かにも、存続のためにご努力いただいた。

美濃部 もっといえば、大内先生がやめられてからですよ。ばくにはとて大内先生だけの威令がないし、それから大内先生ほどほかの先生方は熱心でないし、大内先生がやめられたということが没落の第一歩だったと思いますね。

三猪 しかし、大内先生が第一線にいらっしゃっても、行政委員会をやめるという流れはとめられなかったかもしれませんね。

美濃部 とめられなかったでしょう。何か法律で攻めてくるからね。(笑)

三猪 行政委員会というのは、要するにアメリカ式でしょう。ですから、日本の独立とともに廃止することになったのではないか。

ISIの思い出

三猪 ちょっと話題を変えますけれども、先生が教育大にいらしてから後になるのですが、東京教育大専任になられたのは34年の2月なんですけれども、35年にISIの32回総会がありまして、そのとき先生は企画部長という名前になっているのです。そのときはすでに統計基準

局長は後藤さんなのですが、ISIに関して何か思い出
 というか、一番接触があったのはISI事務局長のルー
 ネンバーグでしようが、何かISIのことについて、ど
 ういうことでもいいですが……。

その前に、戦後、先生のISIとの関係は、ベルンに
 オブザーバーとして出席なさったことでしょうか。大内
 先生、森田先生、ジョーンズさんと一緒にいらして。そ
 の次に、27回ISIのニューデリー大会に増山さんと一
 緒にいらっしゃっているようですね。ブラジルの第31回
 総会にも行かれて、先生にとってはISIとのかわり
 は4回だと思うのですが。しかし、ISIが日本で開か
 れたということは、2回目とはいえ、相当大きなイベン
 トだったと思うんですよ。

美濃部 ぼくのと時だった……？

三瀨 先生は教育大教授で、ISI実行委員会の企画部
 長。

奥野 職務会員でなくて、個人会員になっておられたん
 じゃないですか、東京大会は。

美濃部 個人会員になっている。

奥野 いまはもうおやめになったでしょう。

美濃部 いまはやめている。

三瀨 肩書きは日本の機構からいうと、先生は事務局の
 中の企画部長なんですよ。統計審議会委員となっている。
 しかし本職は、昭和35年は東京教育大教授です。ISI
 では非常にご苦勞なさったと思うんですけども、田村
 町のNHKホールでオープニング・セレモニーをやり、
 皇太子が来て、先生が進行係をやっていたのを記憶して
 いるのです。

美濃部 ぼくは世界大都市会議はよく覚えているけれども、32回I S Iのことはあまり記憶はないですね。とにかくI S Iで一番印象に深いのは、やはりベルンだよ。これは戦争直後の24年9月。まだ食糧も不足であったのが、チョコレートを食べられるし、白いパンを食べられるし、プロペラの飛行機だったけれども飛行機に乗れるし、非常に珍しいことばかりだったんだ。統計については、ぼくはよく英語がわからないけれども、サンプリングの手法なんか中心になっていまして、とにかく世界の統計というものは日本の統計とまるで違っているということをつくづく感じたですね。

そうして、統計のことだけでなく最も感心したのは、よその部屋でやっているラジオがイヤホンで聞こえるんだ。それがどえらく感じたし、それからナイロンの製品を見て、何だろうと思った。ナイロンで感心したのは、3カ月勉強にアメリカに行ったときだな。

それでI S Iのことは、統計についての英語がわからないせいもありましようけれども、報告はすべて統計数学といってもいいけれども、ほとんどすべてが統計数学的なことであって、全くチンプンカンプンで、それが英語ときていますから、(笑)ほとんど影響は受けませんでしたね。

三瀨 占領下でベルンのI S Iにオブザーバーで出られるようになったのは、ライスさんなんかの肝いりですか。

美濃部 ベルン行きはライスさんのおかげで、そしてマッカーサーの直接のお声がかかり。

三瀨 ジョーンズさんは司令部の人ですか。

美濃部 そうです。私たちのパスポートもアメリカ人だ

ったのではないか。

三瀨 占領下だから。

美濃部 多分、2世か何かでね。それでイギリスの植民地の方は通れないんだ。それだから、南の香港からインドを通るルートは通れなかった。まずキスカにとまって、ニューヨークにとまって……。

三瀨 向こう回り？

美濃部 ロンドンにはとまれたんです。そして帰りがまた飛行機がなくローマに出て、ローマからフィリピン・エアラインでフィリピンに行き、そうして帰った。

フィリピンのマニラにとまった。とにかくぼくらが民間人で行った最初だったらしいですね。何だか険悪で。

三瀨 反日だ、たでしょうからね。

美濃部 反日です。日本が悪いことをしほうだいした後でしょう。そして大内先生が夜になって散歩に出よう、出ようというんだ。いけません、やめましょうといったけれども、あのがんこだから一緒に街に出て、こわかったですね。後から聞くと、やっぱり護衛が見え隠れについていたそうです。そういう印象は非常にいろいろありますけれども。

三瀨 翌年、昭和25年に、先生はさっきおっしゃったように、アメリカに統計行政の観察に森田さんと厚生省の曾田さんなどと一緒に行かれたと書いてあるのです。

美濃部 一緒に行ったんじゃないです。多分ぼくは一人で。

三瀨 別行動ですか。

美濃部 別行動です。

三瀨 それは3カ月ぐらいいらしたんですか。

美濃部 3カ月。これはアメリカの統計をよく勉強した
 ですよ。毎日、向こうのスタティスティックス・スタン
 ダード・テレビジョンにスタッフさんの部屋があって、そ
 こに机をくれて、朝から晩までみんなと一緒に、別にデ
 イスカッションするわけじゃないんで、向こうの重要な
 統計をみんな調べるということをやって、CPIとか労
 働統計とか勉強して、非常にたぬになりました。

ただ、何ドルくれたっけな。(笑) ごくわずかしかくれ
 ないんですよ。

奥野 それは向こうからくれるのですか。

美濃部 向こうからくれた。そうしてYMCAの部屋に
 とまって、バスはないし、シャワーを浴びて、何か非常
 に辛い目に遭ったですよ。しかし、3カ月非常に楽しか
 ったな。

三瀨 ジョーンズさんはベルンと一緒にいらしたでしょ
 う。あれは司令部の人だったわけですか。

美濃部 司令部で連れて行ってくれたんです。それでア
 メリカに行っ、ジョーンズさんに非常に世話になった
 から会いたいといったら、スタッフさんが方々調べてく
 れて、あそこの役人にはなっていないくて、わざわざずい
 ぶん遠くの湖のそばにいるんだというので、何か鳥小屋
 みたいな家に行った。そしたら、そこにもいなかったん
 ですよ。

三瀨 引退していたんですかね。

美濃部 どうしたんですかね。

三瀨 そのあくる年の昭和26年にニューデリーのISI
 にいらして、先生は何か日本の統計行政のことを報告な
 された。ペーパーを出されたのかな。とにかくもう1人

は増山さんで……。

美濃部 ペーパーを出したんじゃないですか。

三瀨 エカフェへいらしたこともあるでしょう。いろいろお出かけになったんでしょうけれども、一番長くは、いまのアメリカの3カ月ですか。

美濃部 ええ。あとはほとんど会議だけです。

国の統計制度と自治体

三瀨 それでは今度は、都知事になられてからのお話ですが、だんだん生々しいころ。(笑)

42年4月23日に都知事になられたわけですが、今度は中央でなく地方自治体の長になられた。統計に関することを伺うのですが、したがって、東京都統計部のことを通じてということになるのかもしれませんが、指定統計制度について、自治体の側から見てどういうふうな問題をお感じになったかということですね。かつて指定統計返上論を先生はなさっていたけれども、その辺のところを少し……。

あれはご承知のように、機関委任というので国からお金がいって、地方自治体の統計課なり統計部が全額国の費用で労働力を提供してやるわけですね。

美濃部 つまり、補助金をもらってね。こっちからも少しは出しますけれども、しかしながら、大体において国に頼っているということは、この前、一番先に話したように、地方の独自の統計をとるということでなしに、国の施策の材料をとるということで、われわれの方の地方行政の基礎になるような統計をとるんじゃない。そうして、その役人がほとんどすべて国の補助金で養われてい

るということは、考えていたように非常によくないということをつくづく思ったですよ。

それはもちろん統計部長の人柄によりますけれども、ぼくは何にもまして物価指数のとり方が、つまりあれは、国が貨幣価値の測定としてやるんで、生計費指数としては使うべきではない。その生計費指数というのは地方地方によって、東京都とか京都府とかというふうにとるべきである。あなたにやってもらう前に考えて統計部長にそういつても……。

奥野 斉藤聡さん。

美濃部、決してやらないでしょう。また、その部長があまりよくないからかもしれないけれども。しかしながらその根底には、オレは補助金で養われているんだから、美濃部のいうことを聞く必要はないんだという気持ちがあるんじゃないか。それで統計の人たちとはぼくはほとんどつき合わなかったけれども、非常に不愉快だったです。そういう気風ですから。それであなたに頼んで、生計費指数をつくる。あのときの部長は非常によくて協力してくれたらしいですけれども。

三渚 山ノ上要一という人ですね。

美濃部 そのほかの時期においては、地方行政の基礎材料となる統計をつくるんだ、それがわれわれの使命である、そういうふうな気概は全くなかったですね。

三渚 まさに先生のおっしゃるように、指定統計は国の仕事の下請でしょう。何をやるにも、国に盾ついたことをやっては大変なことになるということを非常に強く思っていたんですね。それで「統計の美濃部」「物価の美濃部」という声があるんですけど、恐らく美濃部先生は

統計以外のことで、東京都でなされることが山ほどあったからだと思いますが、統計に手をつけられるのは意外に遅かったというふうな印象をいう人もあるのです。たとえば生計費指数にしても、美濃部都政の末期でしょう。先生がかねがねお考えになりながらも、統計部の対応がうまく乗らなかつたということもあるのでしょうけれども、やっぱり統計ばかりが知事の仕事じゃないのでしようが、統計部にみずから立ち上がる姿勢はなかつたんでしような。「統計の美濃部」「物価の美濃部」が来たから、今度はオレたちの時代が来たというふうに必ずしも統計部は思わなかつた、自主的に思わなかつた。

美濃部 大体においてあのくらいの大きい行政の仕組みになると、いまいわれたように、こっちからどうしろこうしろということとはなかなかいえないんで、下の方からこういう問題があるからとかなんとかということの問題が提起されて、それはほっとけとか、あるいはもっとやれとか、そういうふうになる。たとえば、ごみ戦争とかギャンブルの廃止とか、あるいは老人医療の無料化とか、ああいうものは下から来ないで上からやりましたけれども、上からやるのは非常に苦勞が多くて、政治的に非常に意味があるというふうなことでないと、なかなかやれないんですよ。

そういう点においてぼくはいつでも気にかかりながら、2期目になってから、生計費指数、物価指数をまず初めに手がけなければならぬとって、こういうことを考えて案をつくってくれとってでも全くやらないんだな。ましてや自分の方からこういうふうなことを考えて、どうでしょうというふうなことは全くないですね。それだけ

ら、補助金で養われているということが統計部においては習い性になって、おめかけさんみたいになっちゃって-----。

三瀨 スポイルされているんですね。

美濃部 いるんじゃないかと思えますね。

三瀨 それは先生が接触なさるのは部長か課長クラスだと思いますけれども、都労連の組合の中では、統計分会はわりあい左翼的だからね。

奥野 あれは待遇改善に関する事だから。

三瀨 だから、仕事を通じて接触する一般統計課員には、生計費指数にとっても生きがいを感じていた人がいましたよ。夜、超過勤務手当に関係なく暉峻淑子さん（生計費指数問題研究会の委員の一人、埼玉大学教授）の家に押しかけたりして。いまでも、後で折があったら申しますけれども、統計局がいまだにあの生計費指数を問題にしてかみついてきているんです。一橋大の先生を先頭に。それに対して、統計局がこういうことをやっているというふうにご注進してくれたのは、実は統計部の人ですよ。そういう意味で、先生が接しられたのは恐らくキャップとかキャップの次ぐくらいで、それはまさに先生のおっしゃったとおりだと思っておりますけれども、やっぱり下からの、統計事務からの盛り上がりというのはたたきばいるんだけれども、なかったわけですね。

美濃部 なかったぞ。

三瀨 それで奥野氏なんかはずいぶんおぜん立てをしてくれて、あの生計費指数ができたんですけれども、先生の感じられたのはさもありなんという気がしますね。

ですから、生計費指数の報告書を出す前日には、事

前にこういう数字を発表するということを必ず統計局に事前連絡に行っている。統計局は筒抜けに知っていて、陰に陽に圧力はあったんだと思いますね。いわんや……。美濃部　そういうことは知っていたけれども、また論争をやるのはちょっとしんどいからね。

三瀨　これからわれわれが順々にやりますけれども。

そうすると、多少これは政治的な発言だったと思うんですけれども、指定統計返上論の真意は、いま大体お話しになったように、地方統計課がスポイルされて、ぬるま湯につかっているんじゃないかという意味の表現でしょう。

美濃部　地方自治体の統計部というものが幾つかの指定統計を国家の補助金においてやる、それだけが使命であるというふうに考えていて、地方住民の幸せのためになるような統計をつくるのがわれわれの仕事であるという考え方を持つ人はあまりいないですね。それは統計に長くいた人は大体において、国から来た指定統計をやるということだけが仕事である。それから、よそから入ってきた新人は腰かけだ。早くどこか本流の方に行きたいというふうなことで、部長とかなんとかという人が知事のところに来ていろいろ訴えるということは、ほかの部や局には非常にありますけれども、統計部には全くない。ぼくが重い腰を持ち上げさせて生計費指数をやった。だから、あれだけは大体こういうふうになっていますということを報告に来ましたけれども、一般には全く国の仕事だけをしている。

それは職業安定と同じですよ。あれはやっぱり国が任命権があって、都が金を出しているんですからね。職業

安定なんというのはどういうふうになっているか、全然報告に来やしない。まるでわからない。だから、ぼくと大内先生が考えていたように、統計も本当の地方自治体の統計、地方住民の幸せにつながる統計というのは、やっぱり組織を変えなければダメだったんだなということをつくづく思ったわけですね。

三瀨 もちろん、国レベルの統計はつくらなければ国としては必要ですから、それを自治体の統計課を通じてやらせると、いまのようなことになっちゃうでしょうから、最初に大内先生のお考えになられたように、国の統計はどこか別のルートでつくらせて、自治体統計課は本当の自治体のための統計をつくるべきであるということですか。

美濃部 それはいろいろなやり方があるでしょう。ぼくと大内先生とは調査も国がやるべきだ、地方にはおろさないで、ちょうど作報と同じような形にすべきである、それで国の直接的な施策に必要な統計は、それで十分じゃないだろうか。だからもっと重要なのは、都民の生活に関連する統計である。そういう意味においていろいろ問題はあり、やり方が非常にむずかしいけれども、身障者に関する統計であるとか、老人に関する非常に詳細な統計であるとか、つまり、地方住民に密着した統計というものはたくさんあると思うんですけどよ。それが一つもやられていない。

三瀨 ただ、先生の在任中の、あれは何期になるのかな、昭和46年から生計分析調査というのを都がやっていますでしょう。あれは国のサンプルの追加調査で、国のサンプル500に、もう500上乗せしましたね。ああいうサン

プル数の上乗せをやっている都道府県は十数県あるのですけれども、昭和56年度からやめになった、階層別の家計調査や生計費指数のような、サンプルの上乗せでなくて、本当の自治体独自のものというのはあっても非常に少ないでしょうね。せいぜいやられるのは、国のサンプルに上乗せする調査です。生計分析調査だって、先生の主張を統計部が受けてやったんじゃないの。ぼくはそう思いますね。開始が46年ですから。

奥野 あれをやっているからいいんだというのが、統計部長の逃げ口上だった。

三渚 先生が委員会つくられたのは斎藤部長の末期でしたから、ほとんど山ノ上氏の時代ですよ。

美濃部 しかしいま考えると、君たちにやってもらった生計費指数がいまやられていたら、非常におもしろいんだがね。

三渚 それは「エコノミスト」とか朝日なんかで、ちょこちょこいまごろ取り上げているんですよ。

美濃部 それから、総評があれのまねをしているんじゃないの。

三渚 いや、総評は都と同時並行的にやった。この間も総評に話しに行っただですけれども、東京都は目下はダメになっているから、総評はぜひ続けてやる。ただ、総評の家計調査は年に1回、10月だけなんですよ。それから組合単産におろして調査対象をつかまえています。大分やり方は違います。階層別とはいえないのです。けれども、おおむねあの線でやっている。だから、総評や婦人団体の人は口を開けば、あれをなぜやめたかというのでみんなブーブーいっています。

美濃部 中小企業の家計をとるというのは総評ではしていないんだな。

三瀨 していない。やっぱり大組合、官公労と民間がやっている。東京都の場合は官公は外しまして、民間だけでしたから。しかし、何かの形であれを実施したい。たとえば、隣の神奈川県で何とかあのノウハウを使ってくれないか、など、いま考えているところです。

国の指定統計のあり方

三瀨 自治体と中央との統計制度における関係は、大体以上に尽きますね。自治体がみずからの統計をつくらなければダメだということですね。それで、先生は攻守所を異にしてというか、長い間、指定統計を推進する側の責任者、そして自治体の責任者でいらした。それが奥野君の計算によれば、統計の仕事にちょうど12年間おられたことになるそうです。それに都知事もちょうど12年間です。自治体側の責任者として12年間です。指定統計制度そのものは、これはしょうがない。あつてしかるべきでしょう。

美濃部 指定統計はあつてしかるべきではあるのですけれども、指定統計が指定統計であるがためには、国の力でやらなければいかぬのですよ。

三瀨 全部をね。

美濃部 全部を。それでなければ、人に頼んで正確なのができ、こないんで、それができなければ委託をして、その統計にかかるいろいろな費用すべてを払う。しかしそうなると、指定統計をやるために人員が要りますから、それをいつでも置いておくわけにいかないし、フラクシ

エートしますから、どうするか。それは国で考えるべきである。

三瀨 調査時期をずらして、平準化ですね。それはいま行管でも手をつけていまして、周期が重なってはいしょうがないので、平準化して、いつでも平均して仕事が行くようにということは考えているようです。

ただ、一番根本は、機関委任でやる仕事だけで、能事終われりというか、首はいつでも向こうに伺いたきりになる。自治体の首長がいつかわるかかわらないということで、危なくない方をやるということになるんですね。美濃部 前からいっているけれども、労働力調査だって、失業者というのが変な定義ですからね。

三瀨 就業構造でユー・ジュアル・ステータスはやってはいるんですけども。

美濃部 ああいうのだって、あれと違って本当の失業者をどういうふうにするか、定義はむずかしいですけども、本当のいわゆる常識的な失業者というものを数えるということはあるべきだ。

三瀨 不完全就業のことですね。

統計法の8条による届出統計。自治体が主に届ける。あれはほとんど統計基準局長が受け身で受け付けている。

美濃部 有名無実だ。

三瀨 届け出っ放しというか、届け出なくても怒られないとか。承認統計また同じです。

美濃部 しかし、届出統計というのはぼくは必要だと思うんですよ。届け出して、どこで何がやられているか、その内容を調べるのではなくて、記録をしておくというだけのために、とにかく届け出てもらおう。そうすれば、

正確に日本全国でやられている統計調査が集まる。それは必要じゃないかな。

三瀨 一番問題は、指定統計の問題ですね。

美濃部 もちろん。だから、その内容に踏み入っているいろいろな意見をいう、そういうことはできやしないですからね。

統計審議会のメンバーについて

三瀨 それから、1つ伺いたいののは、統計審議会の委員のメンバーに、ユーザーでは経団連なんか入っていますでしょう、企画庁とか。諸外国では一部行われているけれども、労働組合とか消費者団体の代表も入れるということは、あまり話題にならなかったのでしょうか。先生の前半の12年間では。

美濃部 あまり問題にならなかった。ということは統計委員会も、もちろんユーザーから見てどうこうという問題はあるけれども、生産というか、統計をどういうふうにしてつくるかということが中心点だったからじゃないのかな。

三瀨 ところが、あれからずっと時間がたってみると、ユーザーというのは住民も入ります。それから見ていろいろ文句をつけてくる。しかし、労組代表の委員の問題は全部ノーになってきている。

美濃部 しかし、国のとる統計はいまいったように、国の政策の基本になるわけですから、住民のユーザーが主になる統計というのは、やっぱり地方自治体が中心にならなければいけない。

三瀨 そこに中心が置かれるということですね。

美濃部 しかし、現実には地方自治体独自の統計活動はほとんどゼロでしょう。これはぼくは大変な間違いであって、むしろ地方自治体の統計が主でなければいけないんじゃないかな。そうしてそれを収集して積み重ねて、国全体の統計にする。

奥野 アメリカ式ですか。

美濃部 その調整や何かは、ほかの国の部署でやる。

奥野 そうするのは美濃部先生が後の12年、つまり、知事の12年をやられたからそう思われるんで、その立場でもう一遍見直されたからではないでしょうか。初めの12年のときはどうでしたか。

美濃部 ぼくは、最初から思っていたんですよ。

奥野 そうですか。そうすると、思うとおりいかないでスタートしたわけですね、統計委員会が。統計委員会のスタートのころはまさに、いま問題にしたようなことが問題になったわけですから。

美濃部 いまいったようなことを切実に感じるようになったのは、知事になってからだな。理屈の上からは大内先生と——大内先生はあるいは地方財政なんかやっていたから、そういうことはよく知っておられたのかもしれないけれども、実感としてそう考えるようになったのは、ぼくはやっぱり知事になってからだな。これじゃダメだということですね。

統計基準局長時代あれこれ

奥野 初めの12年間は先生は、いまからいったらお若いころですね。40代の初めからの12年間ですから。ですから、ずいぶん前のことになりますけれども、先生のいま

までの人生をずっとながめてこられて、知事の時代に次ぐほどの重みが、先生にとっての統計の仕事の時代にはあったんでしょうか。

美濃部 統計委員会及び統計基準局長をやったということが、都知事の12年間を務めおおせた基礎になっていると思いますね。

三瀨 それはどういう意味でしょうか。

美濃部 もちろん、学者から突然都知事になったら、それはとてもできやしないんで、行政といっても、統計委員会とか統計基準局というのは一般の行政とはうんと違いますけれども、それでもとにかく役人であって、いろいろなことを学んだというか。

三瀨 官僚組織をね。(笑)

美濃部 知っていたということが非常に役に立った。

三瀨 それ以前は先生は、役人の世界は全くノーコンタクトですか。

美濃部 全然。全く。

三瀨 何かの委員ということもないですね、戦争中だから。

美濃部 ないです。ぼくは、ほとんどジャーナリズムと学者ですから。

三瀨 税金からの月給は、東大の助手くらいのものですね。

美濃部 政治というものとタッチしたのは、統計委員会が初めてです。

三瀨 そこで行政のトレーニングを受けたわけですね。

美濃部 そうそう。

奥野 各省とけんかもしたしね。

美濃部 そのころは君たち相手だから、普通の役人とは非常に違うからね。

三瀨 あおときは、非常に独特な雰囲気でしたものね。

美濃部 その点は、つまり役人というものが最後までぼくはわからなかったと思うな。ぼくはあれだけ革新ぐい2年間やったんだから、都庁の半分の人たちは革新がいいものであるということがわかって、非民主主義的な政策をやったならば少しは抵抗してくれると思ったらば、抵抗をしてくれる人はもうほんの一握りで、あとのほとんど全部は、内心どう思っているかは知らないけれども、行動としては鈴木色一色でしょう。だから、まさに面従腹背とはよくいったものだと思っ、つくづく感心した。

三瀨 逆に鈴木氏から見れば、何だまた自分に面従腹背だと思っかもしれませんね。次にまた革新首長が出てきたときに官僚は有能ですから、どういっ首長が来てもやるでしょう。

美濃部 それだからひっくり返るときも、何も抵抗なしにひっくり返せる。

三瀨 都民生活は全然変わらないといっか。

美濃部 間違いは、革新がいいと思ってみんな一生懸命になっ、たんじゃなくて、都知事のいっことに従っただけだったことです。

奥野 そうでもないんですけどね。

三瀨 先生は、歯がゆいと思われるから。

奥野 しかし、まあみんな生活がかかっていますからね。や、ぱり、月給もらう手前。

三瀨 山ノ上統計部長にしても、首をかけてまで生計費指数を守るといっまでにはいっかないでしょう。彼も、議

会です。いぶん苦しい答弁していました。奥野氏から都議会の議事録もらって、たんですけども。

奥野 それはそうと、先生、ISIの会員とか日本統計学会の会員をおやめになりましたね。

美濃部 ええ。

奥野 何で統計と縁を切ったんですか。

美濃部 いままで統計学会の会費は、相当たくさんあるんだけれども、役所で払ってくれた。自分で出さなければならぬので、自分で金を出すほどのことは何もない。

奥野 まあ、そうだと思いますがね。

美濃部 何もないものね。名前だけだ。国際統計協会の会員ですとって、いばるだけでしょう。それでばくは、そんなことでいばらないでも、いばろうと思えば幾らでもいばることはあるんだから。

奥野 ちょっとさびしいですけどね。

美濃部 めんどくさいんだよ。為替とかなんとか。このごろはそういう手続はめんどくさくなくなったけれども。昔は、そういうことでございます。

三瀨 以上で、大体伺いたいことは、お伺いしたのです。

美濃部 いつでもまたどうぞ。

奥野 これだけわからなかったのですけれども、後藤正夫さんが、山中さんが死んだ後、統計委員会に来ましたね、宮城県から。その辺のところはわれわれ全然わからないんですけども、あれはどういういきさつですか。美濃部さんが事務局長をやっておられて、山中さんがホッと死んで。

三瀨 後藤さんには組合は反対したんです。

奥野 一応、内藤さんがかわりをやったのでしたか。

三渚 宮城県の統計課長だったでしょう、後藤さんは。
美濃部 それでだ。

奥野 それで何で後藤さんが来たんですか。

三渚 正木さんとの関係ですか。

奥野 だれかの口添えとか何かそういうのがなければ、中央官庁の課長にというのは……。千葉三郎氏のひきなんでしょうか。

美濃部 あれはぼくが呼んだんですよ。

三渚 そのいきさつを思い出したら、聞かしてください。

美濃部 どうしたかな。後藤さんに聞いてください。

三渚 や、ぱり先生は、非常に有能だと認められたんですね。

美濃部 思った。本当にそう思ったですね。つまり、宮城県の統計課長をして、非常にぼくのいうことを拳々服膺して、統計について特に熱心であったですからね。ぼくの方から頼んで来てもらったんじゃないのかな。

三渚 あれは別に大内先生じゃないですね。

美濃部 大内先生じゃない。大内先生は知らないです。

奥野 山中さんが亡くなる寸前に、宮城県にいる後藤正夫さんに何かについて相談したいんだけど、上京したときにぜひ寄ってくれという手紙を出している。後藤さんがその手紙を持っていたはずなんですが、探してみただけど、結局見つからないんですよ。ぼくが山中さんの遺稿集を編集するときに後藤さんに聞いたら、そんなことをいっていました。そんなつき合いはあったらいいんです。それについて美濃部先生も、あれはできるということをご存じだったんでしょう。

三渚 内藤勝さんはどうして統計委員会に来られたので

すか。京都大学の法律を出て、東京都の役人もなさって
いたんですね。

奥野 あれは、有沢さんかなんかの関係じゃないかな。

三猪 有沢さんの教えを受けていたわけじゃない。内藤
さんは京大の法学部出身ですから。

美濃部 いや、有沢君の関係だよ。

奥野 内藤さんは東大で講義したんですよ、統計委員会
に入る前に。ぼくはそれを聞いたことがある。特別講義
がありまして、臨時の講義をやったんです。3カ月ぐら
いかな。週に1遍くらい。経済政策か何か。

三猪 内藤さんは亡くなったんですけれども、先生から
見て、大変熱心な人でしたか。ぼくらとのつき合いもよ
かったです。

美濃部 そうですね。

三猪 やがて東大に行かれたけれども。

美濃部 何よりもいいことは、あの人は正直だった。

三猪 井上さんとか内海氏とか、満鉄の関係者がいたで
しょう。後藤憲章さんもちょっといましたね。

美濃部 後藤憲章さんはいいですよ。あれは実務家とし
てね。

三猪 もとは満州関係といえは、ほとんど満鉄なんです
ね。

美濃部 何と評価していいのかわからないのは枉さんだ。

三猪 この間、久しぶりにお会いになっ たんでしょう。

美濃部 久しぶりでね。彼についていえることは、統計
にはあまり興味を持っていなかったのではないかという
ことだろうね。

三猪 あの人は東大の法科出ですから。統計法をつくる

ときには、森一衛さんなんかと……。

奥野 杠さんは、いち早く統計法の本を出しましてね。

三瀧 大体以上のようなところでしょうか。

美濃部 あとは、同じ東京だからいつでも来てください。

三瀧、奥野 どうも長時間ありがとうございました。

美濃部亮吉氏略歴

明治37年（1904年）2月5日 東京に生まれる。

- | | | |
|--------------|--|---------------------|
| 昭和 2 | | 東京帝国大学経済学部卒業。同助手。 |
| 〃 7 | | 法政大学教授。 |
| 〃 20 | | 毎日新聞社論説委員。 |
| 〃 21 | | 持株会社整理委員会委員。 |
| 〃 21. 12. 28 | | 統計委員会委員兼同委員会事務局長。 |
| 〃 24 | | 東京教育大学教授を兼任。 |
| 〃 27. 8. 1 | | 行政管理庁統計基準部長。 |
| 〃 32. 8. 1 | | 〃 統計基準局長。 |
| 〃 34. 1. 30 | | 〃 〃 退官。 |
| | | 東京教育大学教授を専任。 |
| 〃 42. 4. 23 | | 東京都知事（～54.4まで 3期在任） |
| 〃 56. 6 | | 参議院議員。 |

